
Bloodshed

鼎都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bloodshed

【Zコード】

N1593V

【作者名】

鼎都

【あらすじ】

軍に飼われた少年。「死神」の異名を持ち、月光が降り注ぐ夜を駆け巡つては赤い大輪を咲かす。

心の死。人の無。

彼に救いの手を伸ばすのは?

説明（改正版）&世界観的な何か（前書き）

不定期といつから多分頑張っても月1になるであれこれとこま頑張つてみる

ネタバレ…は一応注意しておいてください…

説明（改正版）&世界観的な何か

秘密を持つ“僕”

嘘をつく“俺”

見ているもの全てが全てではない。

救いの手など要らない。

“奴隸”二八必要ノ無イモノダ・・・

愛ナドト・・・夢ヲ見ルナ

そんな戦乱の世の中、とある国の軍が直接管理する直轄の学園が舞台。

世は戦乱の時代。
全ての人間が、護身用と称し武器を当たり前のよう所持している時代。

愛など存在しないはずの“戦闘学園”には、思春期真っ最中の生徒がいるためか男しかいないはずの学園に黄色い声と、艶かしい声が響き渡る。

それは決して、“尊敬”や“羨望”といった類のものとは違い、男が男に恋し恋愛することによって生まれた“嬌声”。

その学園にはまた、当然のように春が訪れ新入生がやってくる。

キーワード…的な？

学園
戦闘
二重人格（近い形）
最強

暗殺者

殺人
殺戮
死
血
口
グ

…とりま、まとめるところな感じ。

はい。
全く…

暗い話、黒い話が大好きな鼎都です。
(すみません…)

注意事項的な

この小説は今まで通り、グロ及び残酷な描写含め、様々な暗黒シーンが恐らく出てきます。

真っ赤な大輪。

血飛沫

血の雨&血の海

殺戮衝動

などなど……あんまりどうか下手すぎますけどね……。

15歳未満は絶対に読まないでください。
変な影響を…『えてしまつ…かもしだせんから。

すみません。

病んじやつてる子

ヤンデレ

背景が灰、黒、赤

とか、好き過ぎてやばいという人間的にも終わってそうな奴ですんで…はい。すみません。（おもつきし血口主張＆血口意見）

ところがとて、まあとつま15歳過ぎて多少のグロならOKだよ

！とクリアした方は次のキャラ紹介から遊び始め。

キャラは本当に雑多です。

では…偽りに続きヤンデレっぽいのを…ヤンデレ？弑紀けやんせ…
ただの病んじやつてる子？

とこう」と、まあ、ただの病んじやつてる子たちをよろしくお願
いしますとともに、楽しんでいただけたらなあ…と思ひます。

人物（前書き）

簡単なキャラ紹介です。

隨時更新していこうとか思いますが、キャラが出るたんびに（新キャラが）全然設定を考えずに出すもので書こうとも書けないバカです。

忘れるというオチも無論あります……申し訳ない……

努力は……致します……。

B	O	W	H	身長
誕生日				体重
				年齢

人物

御坂 碓 みさか せん

H : 172
W : 57

O : 15

B : 12 . 24

黒髪黒目、地味キャラ

授業中や必要時のみ眼鏡（黒縁の通常眼鏡）

武器 日本刀（斬雪）

草部 正芳 くさべ まさよし

H : 170

W : 60

O : 15

B : 10 . 27

スポーツ系少年ぽい文系少年。
短髪茶髪鳶目

武器 銃(一丁銃)

城之崎 結城 きのわき ゆうしき

W : 68 H : 180

O : 17

B : 2 . 18

ツリ目、モデルスタイルのかつこいい系

生徒会長で、仕事時、授業時は眼鏡（赤縁）

金茶の髪蒼眼

武器 鎖鎌

稟議 交喙 りんぎ いすか

H : 162

W : 50

O : 16

B : 4 : 1

垂れ目の美人で可愛い子。

きちつとすればちやほやされるような子。

無造作に髪を放り似合わない眼鏡（伊達）をかけている。

紺色の髪、金の目

武器 短刀

桔梗 要 ききょう かなめ

H : 175

W : 63

O : 17

B : 6 . 13

狐目の美人さん。

艶やかな黒髪、茶目。

極度の潔癖症。

武器 毒物、爆薬、ライフル、ショットガン

瀬和木 緑 せわぎ りょく

O : 17
W : 72
H : 182

B : 3 . 31

焦茶髪茶目

アクセサリーを身につけ、ファッショングセンスが長けている。

武器 両刀ナイフ

刃・柄・刃

橘 薦 たちばな そう

W : 73
H : 184

O : 18

B : 4 . 6

武器 針

睦 悠都 むつ ゆうと

H : 185
W : 75

O : 27

結婚はしていない

黒髪深緑目

学園のO.Bであり、染まっている。
一応バイで、バリタチ。

武器 主に銃

李 粥 り いく

H : 177
W : 66

O : 16歳(?) 高2に籍を置いている(一応)

B : 7 . 14

純中国人だが、日本語はスラスラ。
中国でも最強最大規模のマフィアの息子だとか噂されているが眞実
は闇。

神出鬼没で、気配を消すのが上手い。
授業にもまともに出ていない。

気配を消す以外に、読むことも得意とする。

武器 不明

陵 鶩 みはか しゅう

双子の兄。

悪戯好きだが、ちゃんと限度は考える。

弟想い。

陵 鶩 みはか しゅう

双子の弟。

悪戯好きでやんちゃ。

危険な事にまで手を突っ込んでしまう。

H : 168
W : 55

O : 15

B : 9 . 9

武器 ナイフ

ナイフの刃渡りは 5 cm ~ 10 cm と、様々。
器用に使いこなし、双りで操る。
一人でも可能だが、双りの方が効果が絶大。

一卵性の双子で、そつくりさん。

過去に、クラスが別になつたことがありよく入れ替わつていたが、先生方の会議の結果、入れ替わつてもうつては困るということでのから同じクラスにされた。

(双子の策略どおり)

protoype (複数形)

時にアナタは、プロローグとこの後のヒューローグを経験したことありますか？

『なあ……お前は、死を、死とこうものを越えたことはあるか?』

田の前の少年は訪ねる。

そこには少年一人しかいないのに。

誰に…ではなく、誰かに。

誰かに…ではなく、空虚に。

彼は“空”を見上げて、仰ぎ見て、儚げな声で言つ。

問う。

『お前は、生と境、死と境、無と有を考えたことは、感じたことはあるか?』

愛するものを

守るために

愛してしまったものを

殺すためか

“人”を手に入れ

制御不可であるためか

何れにせよ

最後は

しか残らない。

“死”の選択のみ

悲しきものは溺れる

嬉しきものは跳ねる

哀れなものは投げる

怒れるものは掲げる

犠牲に

偽善に

狂気に

に黙讐

狂う狂う

人の中は真っ黒

黒

黒

そんな時代に

生死は必ず存在

存在

危険を

回避

不可能

可能

戦闘

エラー

弱肉強食

全ては

力のみ

2 (前書き)

生死の境を共感、または体験、あるいは理論付けてみたことはありますか？

人は笑う。

人は喜ぶ。

人は嘆く。

人は怒る。

人は悲しむ。

人は哀れむ。

人は想う。

人は思う。

人は考える。

人は覚える。

人は読む。

人は書く。

人は持つ。

人は愛す。

人は会う。

人は似る。

人は死ぬ。

人は生きる。

人は生まれる。

人は死に逝く。

人は

人は

人は

人は
殺す。

人を

哀
が
故

愛
が
故

悲が故

怒が故

などと

理由をつけてみれば

全てが正当化されたように、見えてしまう現実。

そして、現実という名の幻に身を潜め、生きていくしかない闇の幻想。

理想郷を信じ、生きるものとの影の中に潜む光と真実。

何が正しくて

何が欺かれ

何が正当で

何が偽善で

何が疑惑か

何が嘘なのか

何が真実か

何れも

人だけでは

たどり着けないであろう。

何故なら

人は

人を

人としか

見ないから。

それには

人が情を持つことに関係す。

否。

それならば、
“死人”はどうなのであろう？

3（前書き）

嘘か真か、アナタは正しい決断をしようと見誤つたことはありますか？

3

「Yes,
Master」

「殺れ。
“死神”」

绝望。

恐怖。

恐怖。

時に憐れな瞳を見せ、時に幻想を抱く眼を浮かべる。

そして、

時に残酷な目を見せ、時に残酷な笑みを浮かべる。

希望。

感情。

思考。

思想。

空想。

架空。

虚構。

彼には何もない。

“無”とこつものすりぬき。

彼は“空”。
空っぽの“空”だ。

「任務完了。直ちに帰還いたします」

彼の名前は“空”。

コードネームは“死神”。

彼の存在は完全なる“闇”と“陰”。

彼を見し時は、己の死である。

赤い瞳。

暗闇に光を散らす、白い髪。

黒装束のように、黒一つしか身に纏わぬ彼。

死神たる所以は、彼の“残酷”さであった。

4 (前書き)

アナタは愛す人のために死んでしまいますか？それとも死んでされたいですか？

指示。

命令。

依頼。

彼が動くときはこれらがなければ絶対にない。

「人を殺せ」

といわれれば、人を殺し、

「人を助ける」

といわれば、人を助ける。

そして、

「自分を殺せ」

といわれれば、間違いなく、己に自身の刃をつきたてることだろう。

彼は従順な犬。

感情を

皆無に。

生きる屍。

狂氣

狂喜

狂つことのうれしさ。

それこそが快楽。

彼は“自分”が分からず、“己”を知らずして生を続ける。

彼の意識は無。

彼の無意識は有。

彼は完全なる操り人形。

生きたマリオネットだった。

一閃の流れる刃。

一太刀。

「死を『『』』る」

「ヒツ！…ひぎやつあああつぐういつあぎや」

彼は、必ず「一太刀」で仕留める。

それが、決まり。

それが、おきて。

「『苦労であつた。死神。部屋へ戻り、休みたまえ』

「Y e s , M a s t e r 」

彼に許された言葉はそれだけだ。

否定も

批判も

意見も

全て全てが禁止。

それが彼への、生。

与えられた、死までの生の道。

生きる象徴。

彼の生きがい。

5（前書き）

アナタは人間を何と思つていますか？

「Master」

「来たか。今まで散々、情を捨てないと書いてきたが、今回は別だ。
お前を“作れ”」

作る。

造る。

創る。

? 原料・材料・素材などに手を加えたり部品を組み立てたりして、

あるまともたものを新たに生み出す。

?組織・制度・仕組みなどを新しく生み出す。

?（苦心や努力によつて）ある環境や雰囲気などを生み出す。

?次世代の生命体を新しく生み出す。

?（教育や訓練によつて）好ましい人材や健全な精神・肉体を生み出す。

?土を耕すことによつて作物を育てる環境を生み出す。また、それによつて作物を生産する。

?素材に手を加えて別のものに変える。～にする。

?あるとこに新しい特徴的なあるものを生じさせる。「意図的な行為にもそうでない行為にも言つ」

?新たに財産を築いたり資金を調達したりする。

?ある特徴的な事柄を新たに生み出す。

?物事の原因や基盤を新たに生み出す。

?そういう立場や対人関係にある人を新たに生み出す。

?ことさらにそういう表情や態度をする。また、口実やうその話などをしてしらえる。

?複数のものが寄り集まって、あるまとまった形のものを生じさせる。形成する。

?人が体（の一部）を使って文字や図形を生じさせる。

?そういうと時間や状況を生じさせる。

?人の行動や自然の作用がある現象・状態・物質などを生じさせる。

?「慣用句的に」ある行為によつて貸し借りの関係を生じさせる。

?『「罪を作る』の形で』ある行為によつて罪を生じさせる。罪を犯す。

?『「時を作る』の形で』鶏が鳴いて朝が来たことを告げる。

“ つべる ” につけ。

よくは分からぬ。

そんな彼について、 “ つべる ” との意味は、どういったものとな
りえるだらうか。

それでも、彼は分からずままに応える。

「 Yes , Master 」

彼自身、彼の中身が分かっていない。

そもそも、自分が何であつて、自分が何をすべきで、どうこつた存在であつて、自分が何なのか。

彼にはわからない。

わかる必要が無いと教えられているから。

それならば、必要最低限のことしかしない彼にとつてそれは“知る必要の無いこと”。

その辺を歩く一般人なら応えるだらう。

「私は 。私は学生。私は家族の中の末っ子。私は人間」

こんな簡単な答えでさえも、彼は答えられない。答えることができないのだった。

「朱鷺翔学園」へ潜入せよ

死神

code :

命令書

簡単な通知。

彼に届く命令書といつものほ、全て簡単な言葉でしか書かれていない。

潜入せよといつ言葉に、彼は忠実に従い春の入学に向け、準備をする。

潜入後、何かしらの命令があるまで待機。

それまでは恐るべく、そこからの学生と同じように“学生”として生きることだろう。

大きな変化といつものを感じるだろうか。

大きな進化といつものを感じるだろうか。

大きな存在といつものを感じるだろうか。

彼にはまだ何もわからない。

学校という存在。

人間という存在。

それらが対等であること。

それらがまだ生きていること。

それらが普通に接すること。

彼にはまだ未知なる世界。

6 (前書き)

空を見上げたとき、貴方には何が見え、何を思い、何を考えますか？

見上げた空は遠く

見上げた空は近く

見上げた空は青く

見上げた空は黒く

沈む

沈む

暗闇の奥底へと

深い

深い

溺れる

溺れる

ボクハナンダ？

オレハナンダ？

”コレ”ハナンダ?

寂しき

哀しみ

悲しみ

あ

嗚呼

これは
“無”

ボクハ
”ム
”ダ

オレハ
”
ム
”
ダ

空虚

虛空

空白

「何も考えなくていい」

Y
e
s

「何も思わなくていい」

Y
e
s

「お前は空。そして、死神」

Y e s

「さあ、こいつおいで。私の可愛い可愛い死神」

(憐れなる“人間兵器”よ)

Y
e
s
,

M
a
s
t
e
r

憐れな飼い犬と編入生（前書き）

闇に溺れ、光すら届かぬ世界。貴方なら... 耐えられますか？

憐れな飼い犬と編入生

そのクラスに、嵐が巻き起こったのはつい数分…否、数秒前。

朝のホームルームを行うために担任が時間通りに来たことから始まつた。通常であれば、不真面目とも言えるそのクラスの担任がAM 8:30というホームルーム開始時刻を守つてくることが有り得ないからである。

それも、昨日に伝え忘れていたという、本田の日課の変更と“編入生”がくるという連絡をするために。

本田の日課について、昨日の昼休みには伝えられていたといつの担任はすっかりというよりさっぱりと忘れていたらしく皆は既に本日、水曜日である日課を用意し眩しい朝口に晒されながらも登校してきた。

急な連絡を聞き改めて変更となつた日課の容易をすることは既に、確実に無理な時間帯。

全ては全て、担任の所為である。

それでも担任は何事もなかつたかのように編入所為について語る。

本当にどうかしてゐよ。と嘆いているものは数多く、恐らくはクラス全員が思つてることであろう。

「ほいほい、じゃあ、編入生についてだが、何か小難しいところか

ら来たらしいから仲良くしたってな。学校内の案内は適当に誰かしてやってくれ。基本的なことでいいから。特別教室とかは…まあ、勝手に覚えるだろうからよ。んじゃあ、俺は行く。精々、ややこしい問題を起こしてくれるなよ。バカ共」

それが、生徒に対して言つ台詞か！と誰もが突つ込んだと思つ。それでも、平氣でさつていく担任と何も言わない皆に対し、誰もがすごい学級だと思つことだらう。

ガラリと、音がした方へ皆の視線が集まる。

先程、担任が出たドアが再び開き、一人の生徒が今日室内に入る。

黒髪に、黒目、黒フレームの至つて普通の男子。

おそらく、彼が担任の言つていた“編入生”なのだろう。

「初めまして。御坂殲みさかせんと言います。途中入学ですがよろしくお願いします」

淡々とした口調に、礼儀正しい振る舞い。

それが普通なのだろう。挨拶をした後に礼儀正しくお辞儀をしている。

手には重そうな全教科の教科書を持っている。

回りからは“普通”といつ彼の印象に心を開き、気をくじなづくと声をかける。

開いている席は一つしかないため、皆からの挨拶を受けると重そうな教科書を持ち直し席へと座る。そして、漸く重そうな教科書を置くとほつと一息ついた。

「今日は、木曜日課だとよ。予定表のプリントもらったか?」

「あ、えっと…はい。ありますね」

「敬語じゃなくていいぜ。俺、草部正芳。くさべ まさよし 正芳でいいぜ」

「う、うん。俺はえっと…殲でいいよ」

「おひーよしきくな

短髪に茶髪。

どこからどう見てもスポーツをしている人間にしか見えない彼は根っからの文化系で、万年図書委員や放送部、文学部などといった文系の部や委員会に所属している。現在進行系で、美術部兼文学部だつたりする。

予鈴の後、本鈴がなると同時にクラス内の生徒全員が席につく。

御坂殲、彼もまたいそいそと一時限目の用意をし、大人しく座った。

ここ、朱鷺翔学園高等学部は通常の普通科目、実技科目と特殊科目を修得でき、さらには”戦闘”における基礎基本含め発展を学べる

場でもある。

生徒の殆どが国家を支配、または動かす立場にあるお偉い軍人や政治家に位置する親を持ち、欲望を抱き親に操られるままに、親の権力を振り回すがままに樂で自分にとつて得になる生き方で生きていた。

欲望と快樂に染まり狂う学園内。

“全寮制男子校”という肩書きもあり、思春期である彼らにとつて一番貪欲なのは“性欲”である。

つまりは、学園創立以来女の子との関わり合いのない学園内では性欲の塊が蔓延り同性愛が盛んになっていた。

ホモ、ゲイ、バイといった完全に男しか無理なものや女でも男でもどちらでもという人間が数多く存在している。

それでも、“戦鬪”に至つては全国有数の学校であるためそれなりに優秀なものが多い。

そして、それなりに、この学園には“ただの子供”と言われる“戦鬪に特化”した生徒には相応しいようで相応しくない“闇”と“悪”が漂つていた。

それは同時に、新たなる“事件”と“事故”と称される最悪の出来事の予兆だった。

2（前書き）

無。聞。死。
すか？
貴方は何も知りません。∴世界を知りたいと思いま

「宜しかつたのですか？」

黒いきつちりとしたスーツに、身を包み、礼儀正しく起立している男が問う。

「愚問だな。私には、私にしかわからないことがある。同様に、あの子にしか分からぬこともある。あの子が”自分にしか見えない世界”を見つけられるかもしれない……と私は考えているのだ。憐れな子だよ。私にはそうすることしかできない。全ては彼奴次第だつたからね。多少なりとも、あの子に幸福が訪れる事を祈るよ」

あつさりと返答された、男はぐつと黙る。

そして、渦巻く沸き立つ疑問。

「貴方様は一体、”どちら”の味方なのですか？」

「それこそ愚問だ。私の興味と本心、願いと望み。あの子たちの未来は決められてはいけない。決めないといけない。お前も分かるだらづ。今は、幸せか？」

男の問いに、さらに答える。

周りからは冷血で、尋常ではないことをする人物。
彼のすることは誰にも分からない。分かりようもない。

「失礼致しました」

「いや。いい。そんなことも面白〜」

満足げに笑うと、自身の席を立ち、ビームかへと去った。

男はその後ろ姿を静かに見送った。

「憐れだな。あいつもあの子も、…ああ、あの子。そういえば…道を外したか…？」

自問自答。

独り言を呟く、紳士のよつとしきつとした男。

「先が楽しみだな」

一人、平然と笑う。

黒い黒い渦へと巻き込まれる”あの子たち”と”あいつ”、そしてその周りの人間。

「私が出なければならない幕が上がらないのを祈るよ。”ソラ”」

気づく、応答。

「……あ。……僕ですか？」

呼びかけ。意識。

「なあ」

「そりそり。ミサカ セン。何で途中編入してきたんだ? あ、違うか。入学?」

質問。返答。

「色々あります……書類の提出とかいろいろなものが遅れて、遅くなつたんです」

詳細。返答。

「ふーん。あ、そりそり。俺同室だからようじへ

挨拶。返すといつ“ジョウシキ”。

「よろしくお願ひします。えっと……貴方は?」

聞く。相手を知る。理解。

「俺、木嶋純。授業終わつたから寮行くぞ。どうせ何も言われてねえんだろう?」

理解。応答。返答。

「お願いします」

お礼。礼儀。お願い。

「今回、途中入学する子は特殊でね、特別ではなく特殊なんだ。分最初に言われた言葉に少々驚いた。

普段、何時何処で死んでも可笑しくない環境下に置かれているため驚くなどという言葉はとうの昔に消えていた。

しかし、今回ばかりは予想外のことで驚く。

「小難しいと思つ

かるかね？その子についてはきみにしか教えない。理解してくれるかい？他人に漏らすことがないようにしてくれ」

「はい」

面と向かう男に返事をする。

正直、この男は苦手としていた。何故か。

誰でも”苦手”または”嫌い”というだらう。

何しろ、この学園。

今現在俺が入学し、在学中の俺がいるこの学園の総責任者。つまりは、”理事長”であり、この学園の”最高権力者”であり、肩書きは他にある。

軍直轄の学園、学校等の理事会の”会長”であり、また軍の中でも総帥の次かはたまた同等かの力を持つ人である。緊張と、緊迫した空気。

威圧で潰されかねんと泣く泣く、面と向かっている。

「名前は御坂 磬。君と同じ部屋、同じクラスに入学する。学業に関しては学年一位二位を争うことだらう。スポーツに関しても個人プレーは得意とする」

「…個人プレー？」

「あの子には人間と協力するといふことどころか、何も知らない。何もだ」

「何も？…どういふことです？」

「興味を持つかね？あの子はそのままだよ。何も知らない。ただし、

教えられたことは知っている。学業に関しては得にね。スポーツはルールを知っているものは出氣るが、ルールを知らないものはできない。極端に言えば、自分が知つてることは分かる。知らないことは分からぬ。理解は？」

「何とか」

「あの子には感情がないんだ。教えられてないからね。他にも理由は、はつきりといえばそうなる。だから、あの子には教えてあげてほしいんだ。人間について、感情と、他にも色々

押し黙る。

理事長直々の願いとかそんなことはどうでもいい。

興味を持つた。ただそれだけ。

何も知らない。教えられてない。

教えられてないから知らない。知らないから、教えてもらいう。

道理なようであつたく理にかなつてない。

「俺が教えるんですか？感情を？どうやつて？」

「普通に接すればいい。そして、あの子が聞けば素直に答える。ただそれだけさ」

「はは…はははは。ははははは…！貴方は残酷だ。さすが、軍の中で”非道”と言われるだけはありますね。普通に普通を教える。素直！大いに結構。俺が教えるなんて、冗談としか思えませんよ。普通を教えることほど難しいことはありませんよ。普通に普通を…普通に？無理です。人の人生に流れがあるように、普通を知る

にも流れといふものがあるんですよ。人に教えられて知るものじゃない。自分が感じ、それを文字に表して知る。他人にはその人の感じるものがなんなのかは分からぬ！理解できない！それがまた普通である。そうではないですか？」

「ふふ、私は期待しているのだよ。あの子に。この世界を変えてくれるかもってね。子供の無邪氣さが、未だにあることはいいことさ。君は普通に接し、暮らせばいい。あの子は素直に聞く。だから君も答える。それでいい」

「…面白い。引き受けましょう。残酷な人道外れの外道の依頼を」

「君にも期待しているのだよ」

「分かつてますよ。では失礼します」

教師。

否。

理事長の口から生徒に関して”小難しい”と出るほどの人間。非常に惹かれる。

普通を語れば受け入れるのだろうか。

普通を知らない。

感情を知らない。

人間を知らない。

彼に教えることは、難しい。

だからこそ闘志溢れる。

まずは初めに…

「初めまして。御坂殲みさかせんと申します。途中入学ですがよろしくお願いします」

そう。

ご挨拶だ。

3 (前書き)

普通に普通を。異常に異常を。貴方の生活は退屈な物ばかりでしょうか？

「御坂は、何でこの学校に来たんだ？」

寮への帰路。

俺は、隣を歩く御坂 殘とともに、広い廊下を歩いていた。

御坂は、自分からは何も聞こえとはしない。

話の流れで、自分もとなるような場面でのみ質問をする。

それ以外は全て、俺が話を聞き、ただ聞かれたことに対し返答をするのみだった。

「此処では、様々な事が学べます。他の学校では学べない特殊なものが。将来を考え、いろいろなものを見た結果、此処に入学したいと思いました」

面接でもあるまい。

まるで、面接官に質問され返すように、淡々と答えた。

その言葉には明らかに感情が籠もっておらず、その言葉が不自然過ぎて怪訝な顔を浮かべてしまう。

しかし、相手はそんな顔をまっすぐに見ても何も思つことはないようで普通に見ていた。

本当に何も知らないらしい。

一人、考えに耽つていれば自身の部屋の番号がついたドアが見え、鍵を開ける。

「此処が、お前と俺の部屋。キーは多分、もらつてゐるはずだけど」

「これ、ですか」

「ああ。なくすなよ。後々面倒になるからな」

「はい」

何事もなく普通に過ぎていく時間。
ほんの十数分前の出会いとはいえ、時間があまりにも短く感じる。
相手の反応は全くなき。
言葉の一つ一つに感情が全くなき。
表情が変わることも全くなき。

普通に過ごしている分には特に気がづかない変化。
人間は、第一印象と普段の言動からその人の印象を決め付けそれで受け入れてしまう。
だから、気づかない。気づけない。

「面白い奴」

ふと小さく呟く。

御坂殲には聞こえぬ声で。

何を思い、何を感じ、何を見て、何を考えているのか。

その、無表情で、変わらぬ顔に何も[シ]たない虚うな顔。

初めての深い興味。

教えることから始まり、1を2を3を知り、彼の心に光が灯つたときどくな表情でどんな言動をとるのか。

「楽しみだ」

そう。

これは俺の楽しみ。

単なる”楽しみ”であり、”暇つぶし”だ。

机。

植物。

寝床。

部屋。
与えられた物。

謎
?

謎。

空間が埋まる。

空虚。

「服はクローゼット。本は棚。教科書、ノートは机。鞄は机の横。
刀はベッド」

紙に記されたままにその物らを片付けていく殲。
必要最低限、まとめられた荷物だけが届き、殲は何も思つことなく
それを受け入れる。

男子高校生とは思えぬ行動。そして感情。

部屋には与えられたものだけ。
自分で欲した物は今までにない。

否。

その普通であるが不自然な部屋に、更に不自然にさせる存在の物体。

”刀”。

彼が唯一欲し、受け入れ、手にしたもの。

黒い鞘に收まる、白く透き通つた美しい刀。

波紋は綺麗に波打ち、人を斬り赤く染まるイメージが全くつかないほどに美しく綺麗な刀。

名を”斬雪”という。

白に染まる夜。

その日、とある街ではさんさんと雪が降っていた。
ずっとずっと。

夜を。

暗い闇に沈む街。

雪の白さだけが、街を染め、闇すらも跳ね返す光を晒していた。

闇には光。

光には闇。

コントラストは抜群。

染まらない白と黒。

ただ、異常な一面はあつた。

「綺麗」

誰かが言った。

白に浮かぶ異常な“色”。

白に埋もれてもなお、その自身の輝きを失わぬ“白”。

「お前は何でそんな色をしているの?」

問う。

小さな幼い少年。

刀に魅入られる。

「綺麗な色」

赤。

何かが。

花が散つたように赤が散るその場所で、少年は見ている。

異常な光景をものともせず、少年の刃には刃の中に浮かぶ白。

白だけの刀しか写っていなかつた。

「雪より綺麗」

透き通る白。

どこか、魅せられる刀。

赤で染まつてもなお存在を促す。

少年は叫ぶ。

「斬雪」

「お前、斬雪」

雪をも寄せ付けぬ光。

そして、斬るための物。

少年は幼いながらも”死”を”殺す”を、身をもって知っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1593v/>

Bloodshed

2011年10月9日19時36分発行